

## マタイによる福音書11章「天の御国と世の衝突」

### 1A 旧約から新約への相克 1-19

1B 行いによる成就 1-6

2B 恵みによる偉大さ 7-15

3B 応答しない者たち 16-19

### 2A 無駄に費やされたように見える労苦 20-30

1B 悔い改めない町々 20-24

2B 宣教で疲れている者の休息 25-30

## 本文

マタイによる福音書 11 章を開いてください。早速 1 節を読んでみましょう。

### 1A 旧約から新約への相克 1-19

#### 1B 行いによる成就 1-6

1 イエスは十二弟子に対する指示を終えると、町々で教え、宣べ伝えるために、そこを立ち去られた。

私たちは前回、10 章にてイエス様が十二弟子に対して、ガリラヤの町々に遣わすところを読みました。「使徒」という言葉が初めて福音書で出てきますが、それは「遣わされた者」という意味です。イエス様は、弟子たちにご自分の権威を与えて、その御名によって同じ働きができるようにされました。けれども、イエス様は、それは一時的な実地訓練のように見なしておられました。将来において、聖霊の力によってイエス様の御名の権威を行使するようになります。それが使徒行伝に書き記されています。そして私たちは、今、その延長、聖霊の力によって、主の御名によってイエス様の働きをしていくように召されています。

そのために、弟子たちに指示を終えられたら、ご自身も出かけて、町々で教え、宣べ伝えられました。弟子たちは云わば、先発隊であり、コンサートで言うならば前座と言えるでしょう。

2 さて、牢獄でキリストのみわざについて聞いたヨハネは、自分の弟子たちを通じて 3 イエスにこう言い送った。「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」

私たちは既に、ヨハネが捕えられたという話を読みました。4 章 12 節に出てきます。捕らえられたので、イエス様は公に宣教を本格化させ、ヨハネと同じ宣教メッセージ、「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから。」と宣べ伝えられました。そして牢獄にヨハネはいます。ヨハネも、もちろん

生身の人間です。牢獄にいて、その頭の中でいろいろな思いが出てきたことでしょう。そしてついに、彼は自分の弟子を送ってイエス様に自分の疑いを含め、問いかけたのです。「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」と。

ヨハネの描いていたメシアの到来、そして神の国の到来は、次のようなものでした。マラキ書の最後です。「見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。(4:5-6)」エリヤと同じように、ヨハネはイスラエルの立て直しを預言していました。けれども、それは主の大いなる恐るべき日においてその悔い改めによって救われるためであり、その恐るべき日が到来して、世にあるものは粉々に砕かれ、そして輝かしい神の国が立てられると思っていました。彼が牢獄の中にも、もしそのような兆しがあれば、耐えられたかもしれませんが、そのようには見えなかった。

そこで、イエス様ご自身に、あなたは確かに来るべき方なのですか、それとも他の方なのですか？と疑問を投げかけたのです。興味深いことに、彼こそが確信をもってイエスが、来るべき方なのだと言っていた人です。人というのは、絶えず信仰を持つことについて、心の葛藤を持つのだと、逆に慰められます。バプテスマのヨハネをして、疑い、葛藤があったのですから。

4 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。5 目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。

イエス様が、ここで語られていることは、こちらも濃厚な、メシア預言なのです。神の国が到来した時に、どのような解放が与えられるのかをイザヤは語っています。「34:3-6 弱った手を強め、よろめく膝をしっかりとさせよ。心騒ぐ者たちに言え。「強くあれ。恐れるな。見よ。あなたがたの神が、復讐が、神の報いがやって来る。神は来て、あなたがたを救われる。」そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」そして、貧しい者たちが福音を聞くということについては、イザヤ 61 章に明確に預言されています。「61:1 【神】である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、【主】はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年、…」もちろん、ヨハネが信じていたように、主が復讐を行なわれるということも預言者は語っているのですが、イエス様はイザヤが言った、「主の恵みの年」を実現しておられたのです。

そしてイエス様は、「自分たちが見たり聞いたりしていること」を伝えなさいと言われていました。そ

う、イエス様の宣教の働きについて言えることは、「この方が語る前に、その教えていることを裏付ける行いがある。」ということです。百聞は一見に如かずではないのですが、天の御国というものが見ることができたということです。ですから、イエス様は殊更にヨハネの弟子たちに、ご自分の正当性を説明する必要は無かったのです。ここから分かることは、宣教というのは実質がある、裏付けがあるからこそできるものだという事。私たちが変えられた人生、生活があって、それで語ることが本物であることを相手は知ることができる、ということです。聖霊の力が必要です。(使徒 1:8)

6 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

福音宣教において、とても大切な視点です。天の御国が自分の期待通りに広がっていないと感じます。神がどこにいるのでしょうか？と感ずることがあります。けれども、イエス様は、「つまずかない者は幸いです」と言われます。着実に、恵みの働きをイエス様が行なわれているからです。

## 2B 恵みによる偉大さ 7-15

7 この人たちが行ってしまうと、イエスはヨハネについて群衆に話し始められた。「あなたがたは何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。8 そうでなければ、何を見に行ったのですか。柔らかな衣をまとった人ですか。ご覧なさい。柔らかな衣を着た人なら王の宮殿にいます。9 そうでなければ、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そうです。わたしはあなたがたに言います。預言者よりもすぐれた者を見に行ったのです。

イエス様は、群衆に対して、ヨハネがどんな人間であったかを明らかにされました。イエス様が、確かに来るべき方であることを証言するのに、ヨハネの存在とその役割はかけがえのないものだからです。まず、皮肉とユーモアを込めて話しておられます。ヨハネは、ヨルダン川でバプテスマを授けていましたが、ヨルダン川にある葦を見に行っただけではないですね？と問いかけておられます。そういった、風に揺れるような存在ではなく、全くぶれない人ですね。そして、柔らかな衣とは正反対に、ごわごわの、らくだの毛の衣をまとっていました。これは、ヨハネを捕らえたヘロデ・アンティパスのことを、それとなく皮肉っていると思います。こう言われてから、はっきりと「預言者なのだ、ヨハネは」と言われています。しかし、旧約時代における預言者よりも、さらに重要な働きを行っていたことを、これから説明されます。

10 この人こそ、『見よ、わたしはわたしの使いをあなたの前に遣わす。彼は、あなたの前にあなたの道を備える』と書かれているその人です。

まぜ他の預言者より偉大かと言いますと、旧約時代の最後のマラキが預言した、メシアが来られる前触れをする人物が、まさにヨハネだからです。他の預言者はメシアの到来を預言しましたが、彼はメシアがこう来られたことを宣言し、民が悔い改めて主を受け入れるための道備えをされたか

らであります。

11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

ここに、私たちキリスト者がいかに大きな、栄光に輝く務めにあずかっているかを知ることができます。バプテスマのヨハネは、キリストが来られたことを伝える先駆者という意味で、あらゆる人間よりも優れています。天地万物を造られた神の御子であられ、世を救う方ですから。しかし、その彼でさえ、天の御国に入る最も小さき者であっても、その人よりは偉大ではないというのです。私たちはどう、考えますか？アブラハムの信仰、モーセが神に対して顔と顔を合わせて語り合ったなど、彼らの方が自分たちよりはるかに偉大だと思いますよね？いえいえ、彼らこそが後に来る日、つまりキリストご自身に会う日を待っており、はるかに偉大だということなのです。

ペテロ第一 1 章には、預言者たちが、魂の救いについて熱心に調べて、キリストの苦難と栄光が、自分たちのためではなく、あなたがたのためのもので、将来の世代の人々に自分たちは奉仕しているのだということが分かった、と書いてあります(1:12-13)。パウロは、コリント第二の手紙で、モーセの顔が栄光に輝いたけれども、新しい契約に仕え、御霊に仕える務めのほうがはるかに栄光に輝いていると話しています(3:4-18)。私たちが神の子供になるということが、どれほど栄光に飛んでいるか、神の相続人になっているということであり、神のものの全てを、キリストにあって受け継いでいる者とされているのです。

12 バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。

この言葉は、文法的に訳すのが難しいと言われていました。「激しく攻められている」と訳すこともできますし、逆に、「力強く到来しています」と訳すこともできるのです。攻められているけれども、攻めているとも訳せる。そして激しく攻める者は、御国に敵対している者とも解することができるし、反対に御国を広げている者とも言うことができます。これは、どちらの意味合いでも合っていると云えますね。バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、ということですから、ヨハネが悔い改めを説いてから、彼は投獄され、そしてイエス様が激しい反対を受けているということも事実です。けれども、ヨハネが説いてから、確かに多く人が闇の世界から光の御国へと移されているということも事実です、どちらにしても、天の御国が広がる時には激しい、半ば暴力的なことが霊の世界では起こっているということを指しています。

私たちが、霊的に前進すれば、悪霊どもから猛反撃されるということを知っておく必要があります。問題は、霊の戦いなのに、霊の戦いだと気づかないことです。最大の病は、病であることを認

めないこと、認めれば回復の道がありますが、認めるまでが大変です。霊の戦いも同じです、これは悪魔と悪霊どもに対する戦いなのだとなれば、その後の対処は楽です。なぜなら、キリストが既に勝利者であられ、私たちがキリストにあって悪魔に対峙すれば、悪魔は逃げ去るからです。

13 すべての預言者たちと律法が預言したのは、ヨハネの時まででした。

旧約と新約の違いをイエス様が端的に述べられています。旧約は、キリストが来られることを伝えていますが、ヨハネの時でそれが終わりました。そして新約は約束のキリストが来られたことを証言しています。これから来ることを予告したのが旧約で、既に来たことを証言するのが新約です。

14 あなたがたに受け入れる思いがあるなら、この人こそ来たるべきエリヤなのです。15 耳のある者は聞きなさい。

そしてイエス様が意味深なことを言われています。イエス様ご自身が、「耳のある者は聞きなさい」と言われていますから、全ての人々が聞く耳を持っている訳ではない、聞くことのできる人にこそ聞けるということです。

マラキ書において、主が来られる前にエリヤが来て、建て直しをすると約束されていました。ヨハネの福音書 1 章において、バプテスマのヨハネは、「あなたはエリヤですか？」と尋ねられました。今でもユダヤ人は、メシアが来られることを待ち望むのに、エリヤが来ることを意識しています。(過越の食事の席に、エリヤの席というものがあって、彼が来た時のために一席を空けておきます。)けれども、バプテスマのヨハネは、自分はエリヤではないときっぱりと否定しました。しかし、ルカによる福音書を読むとよく分かります。バプテスマのヨハネの父ザカリヤに対して、御使いガブリエルが、ヨハネを妻エリサベツが身ごもることを宣言しました。その時にこう言いました。「1:17 彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」エリヤの霊と力によって、と言っています。つまり、エリヤに働いていた御霊が、同じような働きをするように、ヨハネにも臨まれるということです。御霊による働きにおいて、ヨハネはエリヤと同じだということです。

ですから、イエス様が後にマタイ 17 章において、このことをじっくり弟子たちに説明されます。「17:11-12 イエスは答えられた。「エリヤが来て、すべてを立て直します。しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることとなります。」イエス様は、エリヤはこれから来るのだと言われています。そうです、イエス様が再臨される前に人々を主に立ち上がらせる働きはします。黙示録 11 章において、二人の証人が出てきて預言を行ないますが、その一人はエリヤだと考えられます。

### 3B 応答しない者たち 16-19

16 この時代は何にたとえたらよいでしょうか。広場に座って、ほかの子どもたちにこう呼びかけている子どもたちのようです。17『笛を吹いてあげたのに君たちは踊らなかった。弔いの歌を歌ってあげたのに胸をたたいて悲しまなかった。』18 ヨハネが来て、食べもせず飲みもしないでいると、『この人は悪霊につかれている』と人々は言い、19 人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『見ろ、大食いの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言うのです。しかし、知恵が正しいことはその行いが証明します。」

「この時代」とイエス様は、呼びかけています。イエス様は何度となく、「この時代」あるいは世代と言ってもよいでしょう、お語りになられています。それは、信仰を失ってしまっている時代、神からの呼びかけに答えない時代です。神が、大きな声を上げてご自分の定められた時代に来られることを決められ、それでキリストを現すようにされたのに、その究極の呼びかけに対して応答しなかったという時代です。私たちも、この警告を受け入れないといけません。初めに来られた時に、数多くの徴があったのに受け入れなかったように、今の時代も数多くの終わりの徴があるのに、人々が無感覚になっていて、応答しないからです。

その応答しない姿を、子供に例えて分かり易く説明しています。何とかして、注意を引きたいと思って子供が、他の子たちに向って笛を吹きます。それでも反応しなかった。今度は喜び、楽しみの音ではなく、弔いの歌によって悲しみを代弁したのに、それでも悲しまなかった。こうすれば、あれ。ああすれば、これ、のような反応です。要は、受け入れたくないのです。その例えを使って、全く正反対のように見える働きをしたバプテスマのヨハネと、イエス様ご自身に対する反応を語っておられます。拒んでいる者たちは、ヨハネが野蠻やいなごだけ食べていたこと。またナジル人ですから、ぶどう酒も飲みませんでした。そして弟子たちは断食していましたら、師匠であるヨハネもよく断食していたのでしょう。「あいつ、気が狂ってるんじゃないか。」と批評しました。そして、イエス様は、恵みの時代の到来を宣言されました。罪人が悔い改めて、親密な交わりを主と持つことができるように、イエス様は食事を共にされました。今度はそれが、罪人の仲間だなという中傷につながるのです。

これが拒む人の心です。その心は人をよく裁きます。自分自身が裁きの基準になっています。多くの恵みがある時に、それを罪を犯しているかのように言うのですが、実はそういった律法主義は、自分に対して甘い、自分の都合に合わせて神の言葉を部分的に適用しているにしか他ならないのです。ですから、徹底的に御言葉に厳格な、ヨハネのような人を見るとこれまた、自分を守るために、相手を裁くのです。

そしてイエス様は、「しかし、知恵が正しいことはその行いが証明します。」とされていますが、そうです、偽預言者についても実によって判断しなさいと言われました。言葉としては、正しいこと

を言っているように聞こえますが、その人がでは何を行っているのか？結局、それで何をしたのか？ということを見ていく必要があるということです。イエス様は、ご自分の行い、わざを強調しておられました。ご自身が信じられなくとも、わざを信じなさいとも言われたことがあります。それだけ、その行いがその知恵の正しいことかどうかを証明します。

## **2A 無駄に費やされたように見える労苦 20-30**

こうして、バプテスマのヨハネについての位置付けを、イエス様ははっきりと語られました。次に、具体的にガリラヤの町々の中で、もっとも力ある御業を目撃した三つの町に対して、裁きを宣言されます。旧約の預言者と同じように、いやそれよりも厳しく裁きを宣告されます。イエス様は恵みの言葉を持ってこられました。それは正義を差し置いて持ってこられたものではありません。旧約は神の裁き、新約は恵みという対立軸で考えると間違えます。恵みというのは、神の裁き、正しさを差し置くのではなく、正義があってこそその恵み、正義があってこそその愛です。そうでなければ、どうして十字架に付けられたキリストが、神の愛の現れなのでしょう？

### **1B 悔い改めない町々 20-24**

20 それからイエスは、ご自分が力あるわざを数多く行った町々を責め始められた。彼らが悔い改めなかったからである。21 「ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。おまえたちの間で行われた力あるわざが、ツロとシドンで行われていたら、彼らはどうの昔に粗布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。22 おまえたちに言う。さばきの日には、ツロとシドンのほうが、おまえたちよりもさばきに耐えやすいのだ。

イエス様は、ペテロの姑の家があるカペナウムを拠点にされて、その周囲に対して、かなりの宣教活動を行われました。コラジンは、カペナウムから北に4<sup>キ</sup>ぐらいのところにあります。私も二度、行ったことがあります。そしてベツサイダは、カペナウムから東、湖に入っていくヨルダン川を越えてすぐに出て来る、ガリラヤ湖畔の北東部分にある町です。こちらにも豊富な遺跡が残っています。そしてカペナウムがあるのですが、その一帯には遺跡はあっても、どこにも人が住んでいません。かつて、巡礼者が多く訪れたという形跡はありますが、ここに人々が住んで町があったという痕跡は残っていません。ここからイエス様が、裁かれたその宣言が今に至るまで確認できるようになっています。

ツロとシドンですが、イスラエルの北に位置する貿易都市国家です。当時の世界貿易、地中海の貿易を牛耳っており、海軍は誰にも負けませんでした。けれども、そこが、漁師が網を繕う裸岩になることをが、エゼキエル書で宣言されています。かなり長い、その町に対する裁きの宣告の言葉は、26章から28章にまで続きます。28章にはツロの背後に働いていたサタンの姿までが書かれています。

このような厳しい言葉を私たちが読む時に、それを宿命的に読んでしまう過ちを犯します。主が、厳しい言葉を語られても、それは悔い改めた後の神の豊かな憐れみという前提があつてのことです。主は悔い改める者にはすぐにでも、その裁きを取りやめられます。今、イエス様が話題にされていた預言者エリヤですが、彼がツロのツアファレテに行った時のことを思い出してください。そこに食べ物がなくもう死のうと覚悟していたやもめと男の子がいました。エリヤは奇跡を行ない、かめの粉、壺の油が尽きないようにしました。それから園子が病気になって死んでしまいましたが、エリヤは生かしたのです。(1列王 17 章)そう、彼女はエリヤからわずかしかイスラエルの神のことを知らなかったのに、彼の言葉を信じ、神の言葉を信じました。それで、神の豊かな恵みにあずかることができたのです。しかし、コラジンとベツサイダは、こうした力ある業が行なわれたのを見ながら、それでも悔い改めませんでした。

23 カペナウム、おまえが天に上げられることがあるだろうか。よみにまで落とされるのだ。おまえのうちで行われた力あるわざがソドムで行われていたら、ソドムは今日まで残っていたことだろう。  
24 おまえたちに言う。さばきの日には、ソドムの地のほうが、おまえよりもさばきに耐えやすいのだ。」

カペナウムが、天に上げられるという表現、イザヤ書 14 章にある、バビロンの王が誇り高ぶって、あの明けの明星、ルシファーがいと高き方のようになろうとして、それで陰府に落とされることを思い出します。こちらも、かなり強い裁きの言葉なのです。そして、比較されている異邦人の町もえぐいです。ソドムです、あの自墮落と不品行にまみれていた町と比較して、彼らのほうがさばきに耐えやすいのだとまでイエス様は言われています。

私たちは、しばしば間違った評価をしてしまいます。それは、神に対して自分はどうか？ではなく、人と比べて自分はどうか？ということなのです。もちろん、ツロやシドン、またソドムのほうが、カペナウムやコラジンやベツサイダよりも、はるかに悪いことを行なっています。けれども、それは人間の町の間で比べているからです。けれども、恵みというのは人を平らにします。全くしっかりしていないクリスチャンが、自分に与えられたところで主に立ち返ろうとしている場合と、しっかりやっているようでいて、実は隠れた動機があつて自分を引き上げようとしているのでは、どちらが優れて見えるでしょうか？人には、明らかに後者が前者よりも、優れて見えます。しかし、神の前では違うのです、反対です。イエス様が後に、後のものが先になり、先の者が後になると言われたとおりです。

神に対してどうか？ということとは、「与えられているものが、より大きな責任を持っている」ということであります。イエス様は、「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。(ルカ 12:48)」と言われました。ちょうど、成人すればそれだけ、責任も重くなります。同じように、未信者と自分を比べて自分の優れていると思ったり、また他の信者と自

分を比べて自分のほうが優れていると思ったりしたら、カペナウムよりもソドムの方が裁きが軽いのだということを思い出してください。

## 2B 宣教で疲れている者の休息 25-30

かなり強烈な言葉を、イエス様は語られました。イエス様も地上において人間であられ、同じように肉体にある弱さを身にまとおられました。激しい霊の戦いがあり、人々の頑なさを直視し、疲れておられたに違いありません。しかし、イエス様は吹っ切れたようです。これは、ご自分の仕事ではなく、父なる神のお仕事なのだということです。12歳の時に、少年であられた時に、私が父の家にいるということ、父の仕事に関わっているということを知らなかったのか？と両親に言われましたが、そこから少しも変わらずに、イエス様は父なる神にお任せになりました。

25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。26 そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。

父のことを、「天地の主」と呼ばれています。一切の権威、主権を持っておられる方です。そして、イエス様は、どんなに語っても、どんな業を行なってもそれでも悔い改めない人々に目を留めるのではなく、父ご自身の思いに目を留めました。「これらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して」と言われています。その頑なさの背後には、神の隠すという主権があったのです。世の知恵や賢さでは、知ることができないようにされていたのです。そして、父の御心は、「幼子たちに現してくださいました」とあるように、子供、いや子供でも幼少の子供ですね、何でもかんでも吸収してしまう、そのまま受け入れてしまうあの純真さです。そのようにへりくだる者たちだけに、お見せしようとしておられるのです。心を広げる人にだけ、見せてくださいます。

27 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。父のほかに子を知っている者はなく、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかに、父を知っている者はだれもいません。

私たちがなぜ、父なる神を知ることができるのか？その中身をイエス様はここで教えておられます。それは、ご自分が父を現そうと心にお定めになった者たちだけに、父なる神の姿が知らされません。そう、私たちがどんなに努力しても、私たちの能力で神を知ることにはできないのです。むしろ、子と父の間にある、このような全幅の信頼関係において、そこから流れて来る啓示によって、知識によって、私たちに知らされるのです。

今でもよく思い出しますが、自分の母親のことです。一生懸命私が、伝道していた時に、息子のことを必死で理解したいと思ったのでしょうか、頭の中で見えぬ神を思い描こうとして必死でした。でも、全然分からないと苦しうに言いました。けれども、それから何年経ったのでしょうか、教会に通

うようになり、ある時、教会の礼拝説教で、天においてイエス様が住まいを用意しておられるという、イエス様の言葉を聞いて、雷で打たれたように泣き崩れました。自分の意思や能力で神を知るのではなく、イエス様が示そうと思っておられる者たちに示されるのです。

では、私たちはどうすればよいのでしょうか？それが、次です。

28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

イエス様のところに行く、ということです。これしか方法はありません。イエス様のところに行くのです。何か自分でやろうとしても、無駄です。それをやれば、ますます自分に重い頸木を負って、自分に重荷を負わせてしまいます。イエス様のところに行きます。すると、安息が与えられます。なぜなら、イエス様ご自身が父なる神との信頼関係を楽しんでいたからです。安息の神であられる父と交わっておられたからです。その安息をイエス様が分かち合ってくださいます。

そして、イエス様の頸木を負います。頸木とは、自分のしたいことではなく、イエス様のしたいことに自分を合わせることです。これは重荷とはならないとイエス様は言われますね。これが最大のサタンの偽りです。イエス様に従うことが、重いことだと勝手に自分で思っていますが、サタンがそれを言い含めます。それを拒んでください、イエス様の言葉の言われるように、イエス様の頸木は軽いと宣言してください。

そしてイエス様から学びます。学べば学ぶほど、イエス様から言われたこと以外をしなくてもよいということに気づくでしょう。私たちは、自分はクリスチャンとして何もしていないという切迫感、劣等感といえますか、基本的に自分を責めています。けれども、よくよく自分を調べてください、本当にその自分を責めている事、心配していること、それ、イエス様にそうしなさいと命じられたことですか？いいえ、自分で自分のことをしたくて、それを達成できていないから自分を責めていることが多いです。しかし、イエス様の命令はシンプルです。それを行っていさえすれば、絶対に、御心から外れていません。むしろ、自分がいろいろ考えて、思い煩っているのであれば、それこそが御心にそぐわないことなのです。

これをイエス様が、ご自分の宣教が拒まれている中で語られたことを思い出してください。イエス様の宣教は、このような困難の中にあっても深い安息を与える働きなのです。